
Shoot The Works

45口径の芸術家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S h o o t T h e W o r k s

【Nコード】

N 8 9 8 1 P

【作者名】

4 5 口径の芸術家

【あらすじ】

この小説は、ありそうで無かった『デビルメイクライ』と『バレットウィッチ』のクロスオーバーです。

Chapter? : 序章(前書き)

この小説は『小説^{ノベルズ}デビルメイクライ2』と『バレット・ウィッチのクロスオーバー』です。

魔帝ムンドウスが創り出した魔具<獣の首>に飲み込まれて辿り着いた先が、バレット・ウィッチの世界という設定です。しかしクロスオーバーなので、バレット・ウィッチの世界に溢れている敵にデビルメイクライ側の悪魔を追加します。

その他にも独自設定が多々ありますが、それは物語中に書き足していきます。

原作は両方ともマイナーですが、知らない方でも程良く楽しめるように努力していきたいと思います。

ちなみに小説タイトルは特に捻りもなく、<Devil May Cry2>のダンテ戦闘用BGM『Shoot The World from my hands』からまんま取ってます。

Chapter? : 序章

闇色の空。

天を覆う黒雲からは豪雨が降り注ぎ、時折雷光が閃く。荒れ狂う天候に呼応するかのように眼下の波は激しく打ち寄せる。

それを、世界が『怯えて』いると錯覚したのは気のせいだろうか。海へと大きく突き出した崖の先端、見下ろせば即座に吸い込まれていきそうな断崖絶壁の上で戦う<人ならざる者>の戦いに。

其処には、現世では在り得ない異界の光景が広がっていた。

この黒い天空を占めるかのように巨大なく三つ首の獣>が、翼もなく、しかし確かに地上から足を離して空に『佇んで』いた。その異常、この世に在り得ざる神秘を体現する異形の存在を、きつと人はありつたけの恐怖と畏怖を込めてこう叫ぶのだろう——<Devil（悪魔）>と。

とある歴史学者の言を借りれば、この世界の成り立ちは非常に脆弱なものであり、己の法則に従わない存在を受け入れる事は出来ないのだという。では、異質な存在を無理に挿入されたとしたら、世界は果たしてどうなるだろうか。

その答えは今まさに、ここに出現していた。

その異質な存在の名を<獣の首>と云った。

人の常識に収まる筈のない力を振り撒き、この獣の化物は咆哮した。世界が震える。恐怖に。

しかしその咆哮は、その実、紛れもない<悲鳴>だった。

この人外の存在は、哭いている。絶望に。目の前の男の圧倒的な力に。

「デカけりや強いつてもんじゃないんだぜ、犬っころ！」

宙に舞う赤い影。押し掛かる大気に銀の髪を揺らしながら男は――

——ダンテは銃を撃ちまくった。その両手に持つ白と黒の獣<エボニー&アイボリー>が轟然と吼え狂い、鉛のキスが眼上の魔犬へと降り注ぐ。揺らぐ巨体。

そこに追い討ちを加える、もう一つの人影。その姿は長身の女だった。

「そんな豆鉄砲では埒があかないわよ、ダンテ！」

叫び、構える対戦車ライフルに装填されていた弾丸を女は——
ベリルは一息に叩き込んだ。放たれた弾丸はそれぞれ三つの首を貫き、天空に苦痛の悲鳴をもたらした。

——<悪魔>は実在する。

彼らはその力を振るい、力無き人間を屠る。殺戮と死の風を轟かすために。それが彼らの本懐、彼らの本能。

しかし、人間はただ狩られるだけの脆弱な存在ではない。これまで文明を発展させた知恵と、絶望的な恐怖に相対してなお諦めることのない勇氣。そして汚れない怒り。

それを武器に悪魔と戦う者たち、ダンテやベリルのように悪魔を狩る者たちを<デビルハンター>と云った。

「オーケー、いい仕事だ」

たまらず高度を下げた獣の首へ向かってダンテが走った。背中の大剣<リベリオン>を抜き放ち、崖の先端から凄まじい速度で飛び上がる。

「三つも首があるんじゃないや面倒だろ？」

嘯き、リベリオンを鋭く奔らせた。二度。一太刀目が左の首を切

り落とし、返す刃が右の首を断ち切った。

一瞬遅れて、傷口から毒々しい色の血が噴出する。
残った真ん中の首が苦悶の叫びを上げた。

「いい手応えだ」

してやったり、といった顔でダンテは海に落ちていく。着地までは考慮していなかったようだ。重力に引かれるまま、しかし動じた風もなく、荒れる海につま先からダイヴする。

「ダ、ダンテっ!!」

「水浴びがしたい気分じゃなかったんだがな、まあいいさ」

慌てて見下ろしたベリルの眼下で、ずぶ濡れになったダンテは海面へと浮かび上がり、軽く手を振った。

「水も滴るいい男の出来上がりだな。惚れるなよ？」

「誰がつ!!」

ダンテの軽口に、ベリルが怒号で返す。

その僅かな時間の中、痛みに怯む獣の首が動いていた。ベリルに向かって。

ベリルは慌てて意識を移すが、しかし遅かった。

「きゃあぁっ!!」

唯一残された首が、彼女の体をくわえ込んだ。念入りに、反撃を封じるように両肩からしっかりと。

「そんなもん食っちゃったら腹が下るぜ。さつさと吐き出した方が身のためだと思うがな」

ダンテは慌てた様子もなく、海面から飛び上がり、断崖の壁を蹴り飛ばして崖の上へと着地する。

直後、銃を抜き放って銃口を獣の首の顔面へと照準する。その視線にはベリルもいる。

「恨むなよ、ベリル。後で手向けに花でも贈ってやるからな」

「縁起でもないこと言わないで！」

金切り声を上げるベリルに軽くウインクを返す。

もちろん、ベリルもろとも撃つつもりはなく、本当の狙いは獣の首の喉元。顔面へと照準したのは、ダンテのささやかな悪戯心だ。そんな事を知る由もないベリルはわりと本気で焦っていたりする。

その様子を楽しそうに一瞥した後、引き金にかけられた指に力を込め——その時、獣の首が口を大きく開いた。くわえられていたベリルは地面へと落下する。

しかし、その体は地面に触れることはなかった。

「——！？」

不可思議な、力とも呼べない力がその体を捉え、何処へともなく運び去ろうとする。それはダンテに対しても同様であった。

それは引つ張られるというより、むしろ落とされる感覚だった。

足場のない空間をどこまでも落ちていく、そんな錯覚。

そして最後の瞬間、ダンテは見た。

自分の体が今まさに、獣の首の口の中へと『落下して』いく様を。

—— 堕ちよ。ここではない、異なる選択肢を辿った世界へ。

不吉な声が聞こえたような気がした。

それっきり視界は閉ざされ、音は遮断され、ついにダンテは意識そのものを失っていた——。

Chapter? : 序章（後書き）

こうしてダンテは、原作通りスパイダが人間に裏切られたパターンの世界ではなく、バレットウィッチの世界へ行く事になります。

今回の話は、ほとんどが原作『小説デビルメイクライ2』から抜粋、自分なりに編集したもので、詳しく知りたい方は購入をオススメします。小説キャラクターのくべリル>の全体像も分かりますし。

Chapter?：紅黒邂逅

2007年——アメリカ西部でM8.7の超大型地震発生。死者4万4000人。

2008年——第5次中東戦争勃発。戦死者60万人以上。

2009年——殺人ウイルス世界中で猛威を振るう。推定死者数3億2000万人。

2010年——異常気象による食糧危機。飢餓と暴動により、死者数推定8億人。

2011年——謎の怪物軍団出現、大量殺戮行為を行う。死者数不明。

2012年——世界中の国家機関が停止。

そして、西暦2013年。

世界は滅亡の危機に瀕していた……

天災、飢餓、戦争、疫病、そして突如現れた醜悪な怪物の軍団による果てなき殺戮……

現代に蘇った<悪魔>が引き起こした数々の災いにより、世界人口は10億以下にまで減少していた。

絶望に満たされた街の中を、死の恐怖に怯えながら逃げ惑う民衆。わずかばかりの希望に賭け、悪魔に抗う人間の武装勢力。

そして、その希望すらも断ち切ろうとする闇の軍勢。

抵抗も虚しく、すでに世界中の国家機関は停止し、誰もが人類の終焉を予感し始めた時、『^{ほうき}箒』のシルエットをした巨大な銃と、＜悪女＞の力を持つ黒い衣装の美しい女性が現れたのだった。

その名は――

そして、＜魔女＞の噂が緩やかに人々に伝わっていった少し後に、真紅のコートを着た銀髪の男が現れる。ある者は彼を、伝説の再来と謳った。

かの＜伝説の魔剣士＞が、現代に蘇ったと謳った。

そして目が覚めた。

「――ここは？」

体を地面に大の字に横たえながら、ダンテは失っていた意識を取り戻した。

「どうなったんだ、俺は……。それに、ここは何だ？」

徐々に意識がはつきりしてくるにつれてゆっくりと体を起こし、辺りを窺う。

同時に体の各部を軽く叩いて、予想外の怪我が無いことと、愛用の銃や剣が失われていないことを確認する。

「獣の首に、どこかに飛ばされたのか？ にしても……」

辺りは普通の世界——民家に車など現代然としている——だったが、彼の嗅覚が嗅ぎなれた臭いに反応した。＜魔界＞と同じ、死と悪意に満ちた臭い。

だが、ここは＜魔界＞ではなく、間違いなく＜人界＞だった。なのに、ダンテの五感は如実にこの世界から違和感を感じ取っていた。それは敢えていうならば『黄昏の空気』とでもいうべき、けだるさとやるせなさが濃厚に立ちこめている。いわば＜別世界＞の感覚とでも呼ばれて然るべきものであった。そう、別世界……

（……案外、的外れな考えじゃないかもな。謎解きも必要だろうが……）

そのためには自ら調べるより他に手はない。それに、行動を共にしていたベリルの姿もない事に気付いた。少なくともダンテの周囲に彼女の姿はなく、気配も感じられない。自分が此処にいるように、ベリルも何処かにいるとは思うが。

（やれやれ、こういう面倒は願ひ下げだぜ）

辟易した気分でダンテは立ち上がった。

2013年10月3日。

アメリカ北東部のとある小さな町。たそがれ時、夕暮れの太陽が揺れる空に、阿鼻叫喚が響いていた。

恐怖を振り撒くナニカから一目散に逃げ惑う人々。その中の一人、初老の男性が躓いて転倒した。自分から離れていく多くの背中に助

けを求めるように手を伸ばす。届かぬと分かっている。

そして銃声が響いた。

彼の目の前で多くの背中が撃ち抜かれ、無残にも蜂の巣にされていく。木霊する断末魔。

あとに残ったのは、転倒した彼と、死に絶えた人々と——その惨劇を為したく異形への者達だった。

『残念だったな』

『ゲームオーバーだ』

彼は恐怖に震えながら振り返る。その戦慄いた視線を、唇の無いおぞましい笑みが迎え入れた。

ソイツらはくガイストと呼ばれる、悪魔の吐息に触れたさまよう邪悪な人間の魂が物質化した怪物。その下等な位置に属するくガイスト兵だった。その数、三体。

ミイラのように痩せこけ、全身が腐乱死体のように変色し、剥いだ人間の皮をマスクにしている様は醜悪以外の何物でもなかった。軍事基地を急襲して手に入れた近代武装、その中の一つのアサルトライフルをこれ見よがしに弄んでいる。

「たのむ……。最後にせめて……」

彼は、先頭に立っているガイスト兵の一体に懇願した。自分の死を悟ったが故に。

ガイスト兵の一体は、くわえた煙草を吹かしながらその様子を面白そうに眺めていた。

「せめて祈りを——」

言葉は銃声で遮られた。

無慈悲にも、ガイスト兵の返答は銃弾の連射だった。祈りを捧げることも叶わず、撃ち抜かれた彼の体は無残にも頽れていく。その遺体に煙草が投げ捨てられた。

『祈り？』

鼻で笑う嘲笑。

『先に済ませとかなきゃ』

そして、あとに残ったのは醜悪な怪物と耳障りな哄笑と、死と血の臭いだけだった。

「Excuse me？ アンタ達、バカでかい銃を持った女を知らないかい？ 俺の連れでね」

唐突に、ガイスト兵たちの背後から声が投げかけられた。まるで友人にそうするように、ひどく軽快な声で。

ガイスト兵はゆっくりと振り返る。

夕陽をバックに、その男は昂然と佇んでいた。茜色に照らされた真紅のコートが炎のように揺らめいている。背中には鈍銀色に輝く大剣。

ガイスト兵たちは質問には答えず、突然の闖入者を取り囲む。男の命の灯火を消すべく。無意味な殺戮を好む彼らの本質を表すかのように。

『いい皮がとれそうだな』

『いい男だからな』

決してジョークにならないその言葉に、男は笑みを浮かべながら返した。

危機的状況である筈なのに、その不敵な態度に激昂しかけるが、しかし直ぐに自分たちの有利を悟るとガイスト兵は高圧的に訊ねた。

『あんた、祈りは済ませたかい？』

「ジーザス。悪いが、お祈りなら一生分足りてる。

アンタも神様にお祈りしたらどうだ。そのブサイクなツラを少しは良くしてくれるかもしれないぜ？」

自分たちをまるで意に介さない傲岸不遜な物言いに、目の前のガイスト兵がとうとう負の感情を剥き出しにして激昂した。手に持つアサルトライフルの銃口を男に向けて照準する。

『テメエはあの世で神様とハメハメしてなーーッ！！！』

下品なスラングと共に引き金が引かれた。

しかし、なんのリアクションも起きない。引き金は引いた筈なのに。

訝しみながら視線を下ろし、そこで彼はようやく気付いた。

自分の両腕が、肘の部分から消え失せている事に。

『はえ？』

その間の抜けた声が、彼の最後の言葉となった。

「お探しの物はコレかい？」

そして男は――ダンテは不敵に微笑んだ。

指し示すように持ち上げた彼の左手は、アサルトライフルの銃身
を無造作に掴み上げていた。その持ち手を握るガイスト兵の両腕を
ぶら下げた状態で。

いつ抜き放ったのか、ダンテの右手には背中の大剣<リベリオン
>が握られていた。

そう、単純に剣でガイスト兵の両腕を切り落としただけだった。
それが、目にも止まらぬ速さで振るわれた以外は。

そして次の瞬間、死の弧月が描かれた。

振り上げられたリベリオンの一閃が、ガイスト兵の体を股下から
頭頂にかけて一直線に切り裂いた。

泣き別れになった体の断面からは、醜悪な見た目に相応しく毒々
しい色の鮮血が噴き出した。そして大量の臓物が地面にぶち撒けら
れる。

『な……っ！ な、な、な……』

ダンテの左右を挟むように散開した二体のガイスト兵は揃って驚
愕した。突然の惨劇に舌が上手く回らない。

「発音はしっかりしな。ABCだ。子供でも出来るぜ？」

相変わらずの口調で嘯き、右のガイスト兵に向かってその手に持
つアサルトライフルを切り離れた両腕ごと投げつけた。パスするよ
うに。

ガイスト兵は狼狽し、ワケも分からないまま自らの武器を手放し
て思わず仲間の『残骸』をキャッチする。そして剣閃が閃いた。

ガイスト兵の体はキャッチした『残骸』もろとも斜めに両断され、
鮮血と共に断たれた上体がずり落ちた。

『ヒッ、ヒアアアアアアアアア！！！！！』

残り一体となったガイスト兵は恐怖に絶叫した。

思考が追いつかない。理解が至らない。

一度<死>を経験した自分が、死の権化へと昇華した自分が、皮肉にも生存本能のままに悲鳴を上げている。何故？ 何故？？ 何故？？？

もうワケの分からないまま、しかし殺らなきや殺られると本能で理解したガイスト兵はこちらに背を向ける赤い死神に銃口を狙い定めた。

しかし――

「背中しか狙えないチキン野郎に、俺の首はやれないな」

引き金が引かれるより速く、ダンテは振り返りざまに最後の一体の首を刎ね飛ばしていた。その断面が思い出したかのように噴血する。

宙を舞うガイスト兵の首は、その醜い表情^{かお}をただ呆然と凍り付かせていた。

「さて、と」

血糊を振り払い、ダンテは剣を背中に収めた。その瞳は、かつての自分のように決然とした情熱を宿していた。

獣の首に飲み込まれ、辿り着いたこの世界は、どうやら自分のいた世界とは違うらしい。少なくとも、あのような醜悪な怪物が我が物顔で町を徘徊して人を殺めるなどという事はなかった。

おそらく、ここは平行存在の別世界。

普段のダンテならば鼻で笑い飛ばすだろうが、しかし先ほどの一からこれが現実のものだと認めざるを得なかった。そして、ここが別世界というのなら、帰る手立てを考えるのが筋だ。

しかし、ダンテは帰る前に一仕事やってみるのも悪くないと思いついてた。

あの醜悪な怪物は、おそらく＜悪魔＞の手先なのだろう。

＜悪魔＞は憎い。

憎いが、それに心底腹を立てる程には、もうダンテは若くなかった。あまりに多くの敵を相手にし過ぎた故だった。

しかし、力無き人々が一方的に殺戮される無残な様は、そんなダンテの心を打った。同情、と言われればそれまでかもしれない。

だが、罪なき人間を殺められて黙っていられるほど、ダンテは大人でもなかった。幾つ年を重ねようとも、この根幹だけは変わらない。そして、もう忘れて久しい若かりし頃の情熱が、今再び燃え上がっていた。

ならば、もはや止まらない。

静かなる炎を裡に秘め、ダンテはおもむろに声を上げた。

「俺がいい男なのは分かるが、そんなに見つめられたら照れるぜ」

ダレカに向けて放たれた言葉。それに返答するかのように銃声が響いた。

無数の弾丸がダンテに殺到する。

しかし、すでにダンテの姿は其処にはなかった。標的を見失った弾丸が彼の立っていた地面に空しく突き刺さる。

「いきなり人を撃つのは感心しないな」

元いた場所から１０メートルほど離れた場所にダンテは華麗に着地した。言葉とは裏腹に愉しげな笑みを浮かべながら視線を持ち上げる。

視線の先、民家の屋根の上に一人の女性が立っていた。その両手には、ダンテを狙って撃ったであろう巨大なく銃＞が持ち構えられ

ている。

それは、まるで魔女の持つ箒ほうじりのようなシルエットをしていた。

「美女に見下ろされるのも悪くないな」

この一言に反してか、その女性はふわりと軽やかに地へと降り立った。身に纏う黒衣が翻る。艶やかな黒髪を優雅に掻き上げ、<彼女>はダンテと対峙した。

「オイオイ、そんな怖い顔すんなよ。せつかくの美人が台無しだぜ、お嬢さん（レディ）」

ダンテの軽薄な態度とは正反対に、彼女は確固たる敵意を持って静かに睨み据えてくる。当然、ダンテには無言で返した。

「無愛想だな。だが自己紹介はしてくれてもいいだろ？ あんた、名前は？」

まるでナンパするようにダンテは気安く訊ねた。

「——<アリシア>」

そして彼女は——アリシアは、ただ淡々と自分の名を告げた。依然、無表情なままだが、とりあえずコミュニケーションは図れた事にダンテは満足そうに「そうか」と返す。

「俺はダンテだ。まあ、好きに呼んでくれて構わないぜ。ハニーでもダーリンでも」

言って、ダンテはウインクを飛ばした。

アリシアはうるさそうに眉を顰める。

この男がガイスト兵三体を容易く屠ったところを遠見に見ていたが、その力はともかく、この軽口は予想外だった。もちろん、悪い意味で。

？——だが油断するなよ、アリシア。あの男の力は危険だ？

アリシアの裡より響く、彼女だけに聞こえる声。

アリシアの契約した高位悪魔＜ダークネス＞が注意を促した。

？分かってる。それに、あの剣……＜魔剣＞ね？

？ああ、それも上等な代物だ。アレほどの剣が、脆弱な人間に扱える筈もない。あの男は、我らと同じく契約者＜か、あるいは——？
？＜悪魔＞、か……。いずれにしても？

倒すだけ、と。アリシアは魔銃＜ガンロッド＞を構えた。

それは紛れもない、戦闘の意思表示。

何処かこうなる事を予想していたダンテ、やれやれと肩を竦めた。

（別世界に来て、女運の悪さは相変わらずか）

内心、ため息を吐く。

彼女に＜この世界＞について色々と訊ねたかったのに。プライベ
ートな事も含めて。

「ま、こういう展開も悪くないか」

続けて苦笑がこぼれる。

ダンテは諦めたように意識を切り替えた。

相手が戦いの意思を固めたのは分かったが、未だに構えすら取らない事をアリシアは訝しがる。飄々とした態度といい、軽薄な口調といい、もしかして自分は舐められているのか。

「どうしたの？ その剣、飾りじゃないんでしょう？」

わずかな苛立ちを滲ませてアリシアは挑戦的に言い放つ。この時点で、すでにダンテのペースに吞まれかけている事に彼女は気付いていない。

どんな時も余裕たつぷりに＜Cool&Stylish＞がダンテの信条だった。

「——剣だつて？」

ダンテは鼻で笑ってみせた。瞬間、腰元から白と黒の二丁拳銃を抜き放つ。

その両手が華麗な舞を見せ、二つの銃身が優雅に、優美に宙を踊り狂う。

回転は激しさを増し、それ自体が生を得たかのように演舞を続け、しかし次の瞬間には二つの銃口はアリシアを捉えていた。

「ハッハア、銃を喰らいな！！」

そして＜真紅の魔剣士＞は銃火を以って＜漆黒の魔女＞との戦闘を開始した——。

<ダンテの解説コーナー>

・ガイスト兵

過去に死んだ人間の魂、それが上等な悪魔の吐息に触れて物質化した怪物のことを<ガイスト>って言うんだが、その中でも最もポピュラーなのがこのガイスト兵だ。

骨と皮だけの痩せた見た目通り、身体能力は大したことはないんだが、元は人間だったせいか妙に知恵が働きやがる。大群をまとめて組織化し、その圧倒的な『数の差』で攻めてくるだけでなく、足りない『質の差』を補うため軍事基地から強奪した近代兵器で武装し戦列を組んだコイツらはまさに<地獄の軍隊>だ。しかも自分達の力を弁えてる分、いっちょ前に狡猾な戦術も講じてくる。ただの雑魚よりよっぽどやりにくいぜ。

ガイストへと変貌するのは総じて『邪悪な』人間の魂ってなもんだから、コイツらの嗜好はホラー映画も真っ青なほどに不気味だ。生前の業の深さが、曲がりなりにも闇の眷属と化したことで更に拍車がかかったのかもな。下品なジョークと無意味な殺戮を好み、特に殺した人間の皮を剥ぎマスクにするなど悪趣味ぶりが際立つ。

まったく胸糞悪いヤツらだぜ、ガイストってのは。一度死んだなら墓の下で大人しくしてろって話だ。きっちり息の根を止めてあの世に送り返してやるとしようぜ。

Chapter?：紅黒邂逅（後書き）

ファーストコンタクトは、もちろん（？）バトルです。

この小説は、両作品を絡ませるといふ意味合いが強いので、物語の内容は深くは構成しません。

デビルメイクライ側のキャラクターを交えたバレットウィッチの物語の再構成をコンセプトに話を進めていきます。

個人的には、ダンテとマクスウェルの絡みと、アリシアvsデビルメイクライ側の悪魔ですね。

やりたい事を詰め込むと長くなりそうですが、しかしなるべく低カロリーの小説にしていきたいと思います。

Chapter? : 人ならざる者

烈火。銃口から火炎と弾丸を吐き出し、白と黒の獣は狂ったように吼えまくった。

背中の剣ではなく、銃を使われた事で不意を突かれたアリシアは意思による詠唱を以って防御の＜魔法＞を発動した。瞬間、この世ならざる壁が地面から生え出るように出現し、バリゲード代わりになつて弾幕を遮る。

「ワオ、面白い手品だな」

攻撃を防がれたダンテは、しかし引き金を引く指を止めなかった。45口径の双獣は吼え続け、殺到する鉛の豪雨が魔法の壁を容赦なく削っていく。

その守りが消滅する前にアリシアは飛び出した。走りながら銃を構えて撃ち放つ。

ダンテは素早く街路樹の後ろに隠れてやり過ごす。

アリシアも同じようにダストボックスの後ろに滑り込んだ。

束の間の静寂が硝煙の臭いと共に漂う。

そして、一拍置いてから銃撃戦が開始された。

両者共に遮蔽物の影から銃を撃ちまくる。ダンテは半身だけ乗り出して肩越しに、アリシアは片膝を付きながら低い体勢で弾丸を放つ。

お互いに遮蔽物でやり過ごしながら牽制し合う。相手の出方を探るように、交互に。

1対1とは思えないほど激しい銃撃戦が繰り広げられ、夕暮れの市街地に＜戦場＞そのものな途切れない銃声を響かせていた。

（埒が明かないな……）

何度目かのリロードを終えたダントは、この牽制以上に成り得ない撃ち合いに飽きたように新たな動きを見せた。しばらく何もせずに相手の様子を窺う。

訝るようにアリシアは銃撃を止めた。

再び束の間の静寂が降りるが、絶え間ない銃声のせいで耳鳴りがある。

「よお、生きてるかー？」

ダントは冗談交じりに訊ねた。

その声で相手がまだ生きている事を確認したアリシアは鬱陶しそうに応じた。再び銃を撃ち放つ。

ダントはやれやれと肩を竦めた。随分と殺伐とした返しだ。便乗して死んだフリでもしてくれたものなら、まだ可愛げがあると思うのに。

（まあ、ぼちぼち勝負に出るか。冗談の通じないお嬢さんには、お熱いのをくれてやるぜ）

ニヤリと笑い、ダントは穴だらけの街路樹から飛び出した。

その両腕は、濃密な魔力を纏ってスパークを起こしていた。闇を体現したかのような赤黒い紫電が迸る。

「……っ！」

その魔力の収束に絶大な危機感を感じたアリシアは急いで行動を開始した。

アリシアが遮蔽物の陰から飛び出すのと同じ時、

「Fire!」

雷鳴のような銃声が次々と轟いた。一発の銃弾ではなく、銃身に魔力を乗せたため吐き出される弾丸全てに魔力が付加されている。プラズマの軌跡を残した弾丸の雨が、アリシアの隠れていたダストボックスを容易く引き裂いた。

これまでダンテの弾丸を遮っていた鉄製のダストボックスの強度を考えれば、魔力の付加された弾丸の威力は重機関銃のそれに匹敵すると言えた。

「く……っ!」

普段の無表情を苦しげに歪め、アリシアは全力で逃げ回る。追撃の魔弾がすぐ後ろを飛んでいき、尾を引く魔力の残滓がチリチリと背中を撫でる。

標的を外れた弾丸は、民家の壁、路地に駐車された車、ベンチ、街路樹、街灯、着弾した何もかもを引き裂いていった。まさに嵐のような銃撃だ。

アリシアは駐車してあるトラックの後ろに飛び込んだ。それと同じ時、銃声が止む。弾切れ。

「よお、生きてるかー?」

弾をリロードしながら先ほどと全く同じ言葉で訊ねる。今度は皮肉を込めて。

(……ムカつく奴ね)

アリシアは舌打ちした。

その余裕たつぷりな態度が癪に障る。苛立ちに眉を顰めながら、

アリシアは反撃の＜魔法＞を発動した。

「……………！？」

今度はダンテが驚く番だった。

アリシアの隠れているトラックが、凄まじい勢いで吹き飛んできた。

魔力による衝撃波で吹き飛ばしただけだが、効果が単純な分、その威力も大きい。魔法の一つにまで昇華しただけはある。

ダンテは一昔前にバイクにそうしたように撃ち払おうとしたが、いかんせん質量が大きい。咄嗟に剣を抜き放ち、それを盾代わりに体への直撃を防ぐ。だが流石に踏ん張りきれず、トラックに押し込まれる形で民家に突っ込んだ。

アリシアは一気に畳み掛けた。

間髪入れず、トラックのエンジンを狙って銃を撃ち放つ。銃火でガソリンに引火し、小規模な爆発を巻き起こした。熱風が美しい黒髪を扇ぎ上げる。

「……………」

アリシアは構えを崩さなかった。油断なく、消えた敵の姿を幻視して睨み据える。

あれは生身では耐えられない筈だ。普通ならばトラックに潰され、火に炙られ、出来損ないのハンバーグになっていると考えて間違いは無いだろうが、生憎と相手は普通ではない。

そして、それを証明するかのように剣閃が閃いた。

車体を真つ二つに切り裂いて、その中からダンテが姿を現した。

コートに付いた煤を鬱陶しそうに払っている。体の方は全くの無傷だった。

「やれやれ、服がボロボロだ。代えは持っていないんだがな。あんたは俺を裸にしたいのかい？」

変わらない軽口が飛んでくる。それに付き合う気のないアリシアは無言で返した。

そして、また新たな魔法を發動した。

魔力を結び、アリシアの手に薔薇^{ローズ}として形を成した。それをダンテに向かって投げる。

「おっと、まさか女性の方からお花のプレゼントを貰えるとはな。いいね、俺はこんなロマンティックな展開に弱いんだ。お返しはキスでいいかい？」

薔薇を指で掴み、ダンテは愉快そうな笑みを浮かべた。

突如、その手の薔薇が花びらを散らした。赤い花弁がダンテの足元に落ちる。

「お？」

それを不思議そうに一瞥する。別に枯れた訳でもないのに。

アリシアは勝利を確信した。それは布石だったのだ。

そして次の瞬間、その花びらから、なんと『槍が生えた』

茨を絡ませた銀槍が、次々とダンテの体を刺し貫く。足は地を離れ、ぶら下がる体からは夥しい量の血が流れ落ちた。

「か……は……っ」

潰れた肺から最後の息がこぼれ出る。もはや助からない。これは即死だ。

だが、惨劇はまだ終わっていないかった。

槍に絡み付く茨が、炎を上げて燃え始めた。その炎がダンテの体に燃え移る。

これこそが、この魔法<ローズピア>の真骨頂。
……徹底的に敵を殺し尽くす。その血も肉も、骨さえ残してやらない。

「……灰となり、土へと還りなさい」

死者に捧げる言葉。

ダンテの体を包む炎は家屋に飛び火し、激しく燃え上がって、やがて崩れていった。巨大な火葬場は、ダンテの姿を跡形もなく呑み込んでいった。

「……」

目の前に広がる火炎地獄をアリシアは無感情に見つめていた。勝利への歓喜も優越感もない、ただ冷徹なる冷たい瞳が其処にはあった。

そして、静かに踵を返す。

「——やるな」

死んだ男の声が聞こえた。

アリシアは弾けるように返した踵を反転させる。見開かれた眼にははつきりと、驚愕。

「ちょっとお前の力を甘く見てた」

真っ赤なカーテンの中で揺らめく黒い影。

その影は、背中から<悪魔>のような翼を生やしていた。

ゆっくりと、ダンテが姿を現す。背筋に死神の吐息のような戦慄を感じながら、アリシアはその姿を目に刻んだ。

「そんなに熱っぽく見つめるなよ。照れるぜ」

軽口は変わらない。その姿も。変わらず、当たり前人間然としたままで。

では、炎の中に見たあの異形の影は一体――？

「……人間じゃない」

確かなのは、目の前の男が、人の姿をしたナニカだという事だけ。やはり<悪魔>、か。

ならば『アレ』は、あの男の真の姿なのか。

「お互い様だろ。いや、あんたは少し違うか。

その力……間違はなく<悪魔>のものだが、あんたからは掃き溜めの臭いがしない。あまりお目にかかった事は無いが――<契約者>って奴か」

ダンテは確信を持って囁いた。

契約者……文字通り、霊的存在と契約した者。あの禍々しい力から察して、どうやら彼女の契約相手は<悪魔>のようだ。

悪魔と契約した者は、大概がその力に食い潰されて自滅するのだが、彼女は完全に御し得ているらしい。それとも、契約した悪魔が協力的なのか。

？——退け、アリシア。今のお前では、奴には勝てない？

その悪魔くダークネスは建言した。冷然と事を判断した上で、だ。

それにアリシアが『まだ戦える』と反論しようとした——その時、ダンテはおもむろに跳躍した。近くの建物の上へ着地する。ガンロツドの銃口がそれを追った。

ダンテは背を向けたまま去ろうとする。

「……逃げる気？」

いつでも撃てるように狙い定めながらアリシアは訊ねた。心無し、その声は硬い。

ダンテは肩を竦めながら答えた。

「ああ。俺は昔から女運が悪くてね。そのせいで眉間に銃弾貰ったり剣で腹を刺されたりと散々だったが、今度は危うくウエルダンにされちまうとこだった。これ以上憂き目に遭う前にさっさと退散させて貰うとするさ」

口調は相変わらずだったが、ゲンナリとした感じがひしひしと伝わって来た。

どうやら多少なりとも堪えているらしい。主に精神的に。

ダンテはゆっくりと振り返った。

「それじゃあな、アリシア。また会う事があつたら、その時は今日よりも優しく頼むぜ。リップサービスもあるなら文句無しだ」

最後の最後まで軽い調子なまま嘯き、アリシアにキスを投げて今

度こそダンテは去って行った。去り際に名前を呼んだのは、彼女を認めた証。

アリシアは苦い顔で赤い背中を見送る。悔しげな表情だった。これは事実上の敗北に相違ないのだ。

アリシアは決然と拳を握り締めた。

次に会ったら——死ぬまで殺してやる。

（次はマジで優しくして欲しいもんだぜ……）

ダンテは疲れたようにため息を吐いた——。

<ダンテの解説コーナー>

・ダークネス

漆黒の魔女アリシアの精神に憑依、という形で契約をしている、自らの肉体を持たない高位悪魔だ。

数々の魔法を引き起こす高い魔力と、悪魔ならではの老練な知恵をアリシアに授けている。

契約の際に肉体を捨てたのか、あるいは完全な霊的存在であるのか。

なぜアリシアと契約しているのか、その目的は一体何なのか。すべては全くの謎だ。

分かっているのは、コイツが悪魔の中でも極上の部類に位置している、ということ、アリシアに対して非常に協力的、ということだけだな。

本当に、それだけだ。詳しく知りたきゃ本人に直接聞いてくれ。アリシアの胸元に声をかければ返事をしてくれるかもな。ま、命の保証はできないがね。

Chapter? : 人ならざる者（後書き）

ファーストコンタクト終了。再会は、やっぱり早いです（笑
その前に、アリシアにはDMC側の悪魔とバトって貰います。何
が出るかはお楽しみ（ヒント：筋肉以外にもちゃんと詰まってるの
か？ な奴。

Chapter? : 灼熱の破壊者

アリシアとの戦闘の後、町に蔓延るガイスト兵を掃討しながら進み、助けた人づてに<この世界>についての情報を僅かばかりとはいえ得たダンテは、この町から橋を渡って行ける都市を目指していた。

どうも、あの都市にはガイスト及び悪魔に抵抗する武装組織^{レジスタンス}が駐留しているらしい。

まずはそいつ等と合流し、それからベリルを搜索しようとダンテは算段を立てていた。組織は好きではないが、人手があつた方がいいと都合がいい。多くの情報も得られる。

そう判断し、歩を進めるダンテは今、うらぶれた路地の中心にいた。

真っ直ぐに橋を目指していたダンテだが、その足を遮るように視覚化できるほど巨大な結界が発生していたのだ。その発生源、おそらくガイスト兵とは一線を描くガイスト>を探して建物の裏側へと足を踏み入れたのだが――。

「……やれやれ、どうせなら美女に取り囲まれたかつたモンだぜ」

ダンテを取り囲むようにそびえる建物の上には、びっしりとガイスト兵が立ち並んでいた。全員が全員、アサルトライフルの銃口をダンテに向けて照準している。

個々は大した力を持たないが、人間と同じで狡猾な戦術的知略を練れるガイスト兵ならではの罠だった。ダンテはこの、丁度すり鉢の底のように逃げ場の無い路地へと誘い込まれたのだ。

『ひやははははっ！ 残念だったな、カッコつけ野郎！ 粹がつて俺達の仲間を殺して人間共を助けるからそうなるんだよ、バカが！』

リーダー格らしいガスト兵の一体が唾を撒き散らしながら下卑た声で叫ぶ。それに倣うように周囲のガスト兵たちも笑い声を上げた。

視線を持ち上げてリーダー格の一体を見たダンテは、耳障りだと言いたげに僅かに眉を顰めた。

「いかにも悪役らしいセリフだな。聞き飽きた類のやつだ。もっとバリエーションを増やしな」

肩を竦めて、ダンテは不敵な笑みを浮かべた。この危機的な状況に緊張も不安も感じていない、余裕に満ち満ちた態度だった。分かりやすく激昂したリーダー格の一体が、醜い貌をよりいっそう醜悪に歪める。

「ほざけ、クソがつ！ テメェら、あの思い上がりを蜂の巣にしてやりな——っ！！」

言うが早いか、次の瞬間ダンテに向けられる全ての銃口が一斉に火を噴いた。空間が轟然とした銃声の渦と硝煙に満たされる。

銃弾の雨が降り注ぎ、撃ち抜かれた地面が土煙を吹き上げる。ダンテの姿はその向こうへと呑み込まれて消えた。

四方八方からのフルオート射撃は、ガスト兵たちが弾倉マガジンの中の銃弾を撃ち尽くすまで続いた。それは二、三秒ほどのあつという間な出来事だった。

「キヒヒヒヒ……！ どうだ、穴だらけの死体になったかア？」

撃ち尽くした弾のリロードすら忘れて、満足げに舌なめずりしながらリーダー格の一体は呟いた。

他のガイスト兵も一様に下品な笑みを浮かべる。唇のない口の端から汚らしく涎を垂らして。

うらぶれた路地には、しばらく醜悪なバケモノ達の笑い声が木霊していた。

その場の誰もが哀れな標的^{エモ}の死を確信していた。あの鉛の豪雨に生身を晒されて、無事に生きている道理など何処にもない。

「——見かけは派手だが、ちょいとばかり刺激が足りないな」

それが人間であるならば。

『な、なんだと!?!』

あり得るハズのない声に、リーダー格の一体が態度を一変して酷く狼狽えた。

その動揺は、まるで波紋のように周囲のガイスト兵たちに行き渡る。ゆえに次の行動に移る事が出来なかった。

「まあ、お前らをぶつちめる前のいい準備運動にはなったぜ」

ゆっくりと晴れる土煙の中から現れたダンテは、変わらず不敵な笑みを浮かべていた。その体は全くの無傷だった。

『ウ……ウソだろ!?!』

リーダー格の一体が思わず後退った、次の瞬間。

「Are you ready?」

赤い風が疾^{はし}つた。

速い。ガイスト兵たちの目には、もはや移動するダンテの姿は捉えられていなかった。かろうじて見えるのは赤い尾を引く残像だけだ。

『ギヤパアッ！』

『ぎゃあっ！？』

そして次々と、ガイスト兵たちはその体を無惨に『すり潰され』ていく。

それは剣による斬撃なのだが、犠牲になったガイスト兵の体はまるで獣に喰い荒らされたかのように原型を留めていなかった。あまりに強烈な一撃を喰らった結果だ。

赤い飛沫と肉片が絶え間なく飛び交う。死の断末魔と共に。

その空間は、もはや恐怖の坩堝だった。『まだ殺されていない』ガイスト兵たちには最悪の悪夢だったに違いない。いつの間にか、リーダー格の一体もただの『血溜まり』へと成り果てていた。

うらぶれた路地には、しばらく醜悪なバケモノ達の悲鳴が木霊していた。

ダンテとの戦闘の後、彼の人を食った態度にすこぶる機嫌を損ねた——常に不機嫌そうな顔をしているが——アリシアは今、町の公園の中でガイスト兵たちを次々と屠っていた。

機嫌が悪いからか、いつもより容赦がなく、射殺されたガイスト兵の体は必要以上に『壊され』ていた。周囲には無惨な死体の破片

が茫漠と散らばっている。

アリシアはおもむろに魔銃ガンロッドを振り回す。一回転した銃身は、魔法のように一瞬で<ショットガン>のそれへと変形していた。

そして、滅茶苦茶に銃を乱射するガイスト兵に向かって銃弾を掻い潜りながら疾走し、その勢いのままガンロッドの銃身をガイスト兵の鳩尾に突き刺した。

ガイスト兵は肺の空気を根こそぎ絞り出され、声にならない苦悶を吐き出しながらその体をくの字に折り曲げる。

「死になさい」

死の宣告と共に引き金が引き絞られた。魔力で作り出された、本物と寸分変わらない散弾が発射される。

ゼロ距離で発射された散弾はその威力を分散する事なく撃ち込まれ、ガイスト兵の体を『二つ』に引き千切った。泣き別れになった上半身と下半身が血と内臓を撒き散らしながら派手に吹き飛ぶ。返り血がアリシアの白い頬を赤く汚した。

『ひ、ひひひひひひーっ！』

最後の一体となってしまったガイスト兵は、ほとんど悲鳴のように叫んで銃を撃ちまくった。

翻る黒衣。疾風のようにアリシアは駆け出した。

殺到する銃弾はアリシアを撃ち貫く事なく、掠める事も出来ずに彼方へと消えていく。

弾が切れたのを見計らって、アリシアはガイスト兵へと肉薄した。距離が縮まる。

『く、来るなアッ！ 来るなあああっ！！』

形振り構わずガイスト兵はアサルトライフルを振り回して殴りつけようとしますが、銃身が直撃する瞬間、アリシアは素早くしゃがみ込んでその稚拙な一撃を躲していた。そして美しい脚が繰り出す足払いが見事にガイスト兵の体を転倒させた。

仰向けに倒れたガイスト兵は慌てて起き上がろうとするが、アリシアの足で押さえつけられた。眼前には銃口が突きつけられる。チエックメイトだった。

『ひッ！ たす、助け……！』

口元から涎をこぼしながら必死に懇願する。

それを見下ろすアリシアはひどく無表情で、その瞳は氷のように冷たい。無慈悲な死神を連想させる残酷な雰囲気だった。突きつけられる銃口には濃厚な死の気配が纏わりついている。

『かつ、神サマあ……っ！』

曲がりなりにも闇の眷属たるガイスト兵が思わず神に助けを乞っていた。あまりに哀れで惨めな醜態だった。

それを嘲笑うこともなく、見下ろすアリシアの目が僅かに細まる。

「……神は慈悲深いわ」

口を開いて、アリシアは静かにそう言った。

アリシアは冷然としたままだったが、ガイスト兵にとってその言葉はあまりに予想外だった。

まさか、本当に助けしてくれるのか？ 思わずそんな疑念が脳裏にチラつく。

懇願が通じたと思ったガイスト兵は、アリシアの言葉に僅かなが

らも希望を見出し――。

「わたし魔女は違う」

次の瞬間、銃声と同時にガイスト兵の頭は吹き飛んでいた。

脳髓と頭蓋が鮮血と共に飛び散る。首を失った死体はしばらくビクンビクンと痙攣した後、ゆっくりと硬直していった。

？アリシア、気は済んだか？

ダークネスが何処か宿めるように言った。

ダンテとコンタクトしてから、アリシアはいつもより感情的だった。敵に対する残虐性が際立っている。感情の起伏が行動にはつきりと表れていた。

「……行きましょう」

自分でも思うところがあったのか、アリシアの声は何処か固かった。全ては脳裏にチラつく赤い影の所為だと分かっている。

静かに踵を返す。周囲は痛みを感じるほど無音だった。死の静寂。この辺りにはもう、人間はいない。

正確には『生きている人間』が、だ。

今いる公園の所々に、板を二枚を重ねて作られた十字架が乱立している。すべて、死者の墓標だった。この世界にはもう、安寧を願って埋葬できる場所すら限られている。

？憩いの場が、今や死体専用とは。哀れな光景だな？

ダークネスが皮肉げに呟いた、その時だった。

! ?

アリシアとダークネスは同時に、強大な魔力の奔流を感じ取った。弾けるようにその発生源、上空を睨み上げる。

日が落ちてきている黄昏の空に、風船のようにく闇くそのものが丸々と膨み始めている。

次の瞬間、破裂寸前まで膨張したソレが飴細工のような音を立てて割れ——禍々しく巨大なく悪魔>を産み落とした。

ソイツは落下するように地面に着地する。圧倒的重量に地面が悲鳴のように地響きを起こした。

AAAAA! ! !
GAAAAA
AAAAA

それが産声であるかのような邪悪な咆哮を放つ。走り抜ける衝撃に空気がビリビリと震えた。

凄まじい威圧感を全身に感じながら、アリシアはソイツの全容を見る。

蜘蛛と同じ姿をした、巨象にも匹敵する巨大な体。

全身を覆う骨格は鋼のような質感であり、その下には溶岩で出来た肉体が詰まっている。

燃え盛る火炎の魔力で空間を蹂躪・侵犯しながら、ソイツはアリアへと歩み寄った。踏み締める脚と触れた地面が発火する。

小柄なアリシアでは見上げるしかない巨軀に圧倒され、合わせるように思わず後退る。

蜘蛛のバケモノの持つ青い複眼と目が合う。その眼光は見ただけで相手を圧殺しかねない迫力を孕んでいた。

有象無象では絶対に持ち得ない圧倒的な存在感。間違いなく高位

の悪魔であろっ、その名は――

?<ファントム>……!?

ダークネスは強張った声で唸った。

『なんだ、このチビは?』

クモ特有の四方に開く口から、ファントムは人語こえを放った。地獄の底から響くような声だった。

『大きな闘気を感じて来てみたが……ただの人間か!』

唾棄するように吐き捨てる。

自分の力に絶大な自信を持つ大悪魔にとって、脆弱な人間を『血溜まり』に変えるなど腕の一振りです足りる。ファントムの目にはもう、アリシアはただの肉の塊にしか見えていなかった。

「――ふ」

そしてアリシアは、小さく笑った。
足りない。

確かに目の前の存在は強大な敵だが、足りない。あの赤い男と比べたら。あの真紅の悪魔と比べたら。アリシアの目にはもう、ファントムはただデカいだけのウスノロにしか見えていなかった。
ゆえに、臆しはしない。

「なに、化け物。筋肉以外にもちゃんと詰まってるの?」

馬鹿にするようにファントムの前脚を拳でトントンと叩く。

その不遜な態度に、ファントムの青い複眼が憤怒を表すかのように真っ赤に染まる。煮え滾る肉体もいつそう赤熱して激しく燃え上がった。

『H A H A H A H A ! ! ほざいたな、小娘が！ 踏み潰してくるわ——！！』

高々と持ち上がった鉄のような前脚が、次の瞬間アリシアに向けて振り下ろされた——。

<ダンテの解説コーナー>

・ファントム

俺はクモが嫌いだ。脚が多すぎるからな。

そんな俺の嫌いなクモの化け物が、このファントムだ。

コイツがなぜ『幻影』という名前で呼ばれているのかは……わからん。

悪魔にとつて<名>は真実であり、そいつの存在を表す<象徴>そのものと言っている。

だからこそ、コイツにも自身を<ファントム>たらしめる<象徴>が在る筈なんだが、さっぱりだ。

第一、その姿と存在感がもはや『幻影』なんて儚げなものとはかけ離れすぎてる。

象にも匹敵する巨体。あらゆるものを焼き尽くす業火の魔力。マ

グマの肉体を覆う外骨格は岩石や鋼のように硬く、魔剣の刃さえ弾き返す。まるつきり重戦車だ。

おまけに、どういう訳かサソリのそれに似た鋏と尻尾まで備えてやがる。

何より恐ろしいのが、実際のクモやサソリの生態と同じで、コイツが<種族>を持つ一匹単体の存在じゃないって点だな。

加えて、この<ファントム族>は生まれて間もない状態からすでに依り代に頼らず人間界に出てこられるほど、地位の高い悪魔の血統だ。まさに大悪魔になるべくして存在する魔界の貴族ってわけだ。だが、一挙に何千、何万と生まれる子グモ——さしずめファントムベビーってところか？——は、やはり幼いうちは他の悪魔に喰われるだけの餌にすぎない。

そういう弱肉強食の法則は人間界も魔界も同じだ。もっとも、その生存競争の厳しさは比べるまでもないだろうがね。

ファントムベビーが十分に育つ確率は、おそらく何万匹に一匹つてところだろう。ま、そうじゃなきゃ俺も身が持たないけどな。

——余談だが、クモとサソリは同じ『クモ類』という仲間らしい。そのクモとサソリの起源を遡れば、ひょっとしたら二匹の特徴を併せ持つこのファントムに行き着くかもしれないぜ。

逆の言い方をすれば、大昔に人間界に出てきたファントムベビーが、出現した場所・地域に応じて進化した結果が、このクモとサソリかもしれないってことだ。それぞれ『ファントムの特徴』を持っているしな。

ま、ただの仮説だ。事実がどうあれ、べつだん興味はないがね。

Chapter? : 灼熱の破壊者（後書き）

ファントムの出現した方法（?）は、DMC2のものと同じです。低い文章力の所為で表現が分かり難かったと思いますが、どうかご容赦ください。

Chapter?：地獄に至る橋

「Hum……まだ腹八分目だったんだがな」

物足りなさそうな表情でダンテは嘯いた。座り込む彼の腰の下には、大量のガイスト兵——その屍で積み重ねられた山があった。

ガイスト兵の集団との戦いは、結果としてダンテの圧勝だったが、それを勝利と呼ぶには、その光景はあまりにも凄惨に過ぎた。

どれ一つとして『まともな死体』などないのだ。悉くが、まるで獣に喰い散らかされたかのように等しく原型を留めておらず、臓腑と血液とが混じり合った濃厚な腐臭は、もはや猛毒の瘴気も同然だった。

その肉塊の山の上で佇み、真紅のコートを返り血でなお赤く染めたダンテの姿は、まさに血を滴らせた悪魔そのものだった。

「食べ放題とはいかなかったが——ま、デザートがあるだけマシか」

よっ、と体を降ろし、ダンテは虚空に向けて視線を定めた。

幾度となく闇の眷属と戦い続けたダンテだからこそ持ち得るく嗅覚>が嗅ぎ取ったのだ。新たな敵の気配を。ダンテの感覚を以ってしても、今の今まで存在を『気付かせなかった』真打の登場を。

信じられないことに、ソイツは初めから其処に『いた』のだ。

巨大な脳漿が宙に浮いている。ソレがぶら下げるように持つ体は、紛れもなく人間のそれだった。

故にこの異形も、死した人間の魂が<悪魔>の吐息に触れたことで物質化したガイストに他ならない。

その名を<ウォールナツツヘッド> 極めて高い精神力と知能とを、肥大化して剥き出た脳に備えるガイストである。

持ち前の高い精神力から『念力』を操り、とりわけ五感を狂わせる催眠能力を持った個体は、他のガイストとの戦闘中は存在を認識する事さえ叶わない。ダンテに気取られせかつたのもそれ故である。その力もさる事ながら、かの者の姿は『おぞましい』の一言に尽きた。ガイストへの変貌は邪なる人間だけの末路だが、ヒトの魂はかくも醜く成り果てるものなのか？

直視しがたいほど醜穢に過ぎる姿には、さすがのダンテも顔を顰めるしかなかった。タフな彼をしても怖気を振るわずにはいられない。

「……おいおい、知的になればいいってもんじゃねえんだぜ、男はよ」

いつもの皮肉を含んだ軽口も、どこか精彩さを欠いていた。これまでの人生で『糞溜め』のような人間の汚さを何度となく見てきたダンテだが、かつてこれほど具体的な嫌悪感を感じた事はなかった。アレは人間のく汚れた部分のカタチそのものなのだ。

脳ミソのお化けは力むように体を強張らせる。念力の発動だった。周囲に散らばる鉄骨やドラム缶、廃車などを引き寄せ、それらを投擲すべくダンテに向けて明確な敵意を孕み――

「長いぜ」

鼻で笑うダンテの手先が閃いた次の瞬間、アイボリーの抜き撃ち（クイックドロウ）が機先を制し、それがそのまま戦いの幕を引いた。

気高き白銀の獣が、その咆哮でもって文字通り敵のオツムを中心に撃ち抜く。

着弾の衝撃に耐えきれず、これまた文字通り敵は脳漿を盛大にぶち撒けた。当然と言うべきか、脳の『作り』はやはり繊細で、それ

故に脆かった。

早々たる退場。臓腑と血液でぬかるんだ地面に、新たな血肉が注ぎ込まれた。

「次からは知的^{インテリ}じゃなくて野性的^{ワイルド}を目指しな、クルミ頭」

敵を倒したことで普段の調子を取り戻したダンテは、もはやお約束とばかりに嘯いて見せた。

辺り一帯に張り詰めた魔力の気配が、そのとき消え去った。行く手を阻んでいた結界が解除されたのだ。

下手人であるウォールナツツヘッドの消滅により、展開を維持できなくなつた結果だつた。

「やれやれ、もう少し楽させて欲しいんだがな」

辟易した声でダンテは呟いた。目指す都市へと続く橋は、もう目の前。

ようやく辿り着いた橋に設けられた四車線道路の真ん中で、ダンテは周囲を見渡したため息を吐いた。

「またこのパターンかよ」

そう鬱陶しそうに言い捨てるや、周りを取り囲むガイスト兵の一斉射撃から逃れるべく、ダンテは行動を開始した。

この街の住民を逃がさないための関所のつもりだったのか、橋には多数のガイスト兵の他、なんと戦車が一台、配備されてあった。軍事基地を征服したガイスト達ならば、べつだん戦車を所有しているもおかしくはない。

「ちつ、面倒だな……」

銃弾を躲しつつ、エボニーとアイボリーの反撃で次々とガイスト兵を撃破していくダンテであったが、戦車が相手では流石の彼も攻めあぐねていた。単純に、火力が足りない。あの分厚い装甲を突破するには、非常に強力な銃火器がいる。そう、ちょうど『彼女』が装備していたあの対戦車ライフルのような――

しよせんは無い物ねだりであると諦め、発射された砲弾をサイドロールで回避したダンテは、そのとき耳を聳する轟音を聞いた。

その凄まじいく銃声には聞き覚えがあった。

そう、ちょうど『彼女』が装備していたあの対戦車ライフルのよう――いや、そのものだった。

「――情けないわよ、ダンテ。私がいなきゃ何にも出来ないの?」

背後から届いた憎まれ口を背中で聞きながら、ダンテはにやりと笑って駆け出していた。

「戦車^{タンク}とやり合うのは初めてなんでね、貴重な体験を少しばかり楽しんだのさ――ベリル」

そう囁くダンテは、戦車の装甲についた亀裂――先の一撃で穿たれた弾痕に目がけてリベリオンの切っ先を突き刺し、そして続け様に剣を上に向かって振り抜いた。

ぱつくりと斬り開かれた車体。出血のように飛び散る火花が、同じく漏れ出る燃料へと引火し、戦車は中の搭乗者ごと爆炎に包み込まれていった。

「――で？　ここは一体全体どういった世界なのかしら？」

開口一番がそれか。

訊ねられたダンテは肩を竦めた。再会できたことを喜ぶとか、もう少し可愛げがあっても良さそうなものを。相変わらず、女運は良くない。

「さアな、俺だって事情がよく読み込めてないんだ。ただ一つ分かるのは、ここが俺達の本来いた世界とは違う場所だってことだけだぜ、ベリル」

そんなの見たら分かるわよ、と言わんばかりにベリルはじろりとダンテを睨んだ。

「そこかしこにミイラ顔のブ男が跋扈してるのよ？　私達のいた世界じゃ在り得ないわ。気色悪いったらありやしない。

おまけにナンパまでされちゃって……。当然、私の返事は銃声の後だったけど。『君、いい皮してるね〜。ここで一つ脱いでみない？　おじさんが被ってあげるよ〜』なんて、まったくナンセンスにも程がある口説き文句だったわッ」

「そりゃ災難だったな」

ぶんすか怒るベリルの様子に、ダンテは苦笑した。

ガイスト兵の下品な言葉遣いは、この女デビルハンターの怒りを大いに買ったらしい。ダンテが戦車を破壊した後、残りのガイスト兵を一匹残らず殲滅せしめたのも、他ならぬベリルであった。

障害がなくなり、見晴らしの良くなった橋の向こう側を見据える

ダンテ。ここを渡った先に、勇敢にも闇の軍勢に立ち向かうレジスタンスがいる。

ベリルと合流する目下の目的は果たしたが、彼らを見捨ててはおけない。

無辜の人々を闇の軍勢から守るため、ダンテは<この世界>で戦うと決めたのだから。

だが、ベリルはどうか？

獣の首に執着する彼女のことで、一刻も早く元の世界へ戻る方法を見つけない思いだろう。

「——ここへ来て、すぐにね。無抵抗なお婆さんがあの怪物どもに撃ち殺されるところを、私は見たわ」

そのとき不意に、ベリルがぼつりと呟いた。

「もちろん助けようとしたわ。でも、間に合わなかった。あんなに助けたいと、間に合ってくれと、必死に手を伸ばしたのに」

どうしても覆せない現実があることは、ベリルにも理解できる。しかし——納得など出来るか。

人が死んだのだ。この私の目の前で、命を弄ぶ怪物に殺されて。人が、死んだのだ。

「……ここが私達のいた世界じゃないのなら、帰る手立てを考えるのが筋だと思う。

でもね、ダンテ。私は帰る前に一仕事やってみたいの。力無い人々の力になりたい。私の魂が、そう言うから」

ベリルはどこか困ったように、吹っ切れたように、決然とした面持ちで苦笑した。

そこまで聞き届けたダンテはどこか困ったように、嬉しそうに、釣られるように苦笑して一つ頷いた。

「奇遇だな。――俺の魂も、そう言ってる」

二人の行動原理が噛み合った瞬間だった。

「とはいえ、これは一筋縄じゃないかないぜ？」

「覚悟してるわ」

橋を渡った先にある都市を眺め、二人は言葉を交わした。

あの場所から風に乗って漂ってくる、死と退廃の腐臭。じわじわと肺を蝕む瘴気。

大気は濁り、遠くの景色を歪め、そびえ立つビル群が生き物のように蠢いて見える。

間違いなくあの場所は、ここよりもずっと酷い人外魔境と化しているだろう。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

「悪魔に比べたら可愛いもんでしょ？」

そう嘯くベリルは――次の瞬間、弾けるように背後を振り返り、その拍子に腰に吊ったサブマシンガンを手に取り乱射していた。

突然の出来事に、だがダンテはなんら動じることもなく、むしろソイツらの出現をベリルより先に察知していたのか漫然と振り向くのみだった。

視線の先に、無数の弾丸にその身を穿たれ、六本の足を弱々しく痙攣させる奇怪な蟲の姿があった。

それは<蟲>と表現するのが最も適切かもしれないが、人間にも匹敵する大きさの体に、その外面は昆虫さながらに筋張っていなが

ら、それでいて哺乳類のように生々しい肉感を備えている。
尋常の生き物では在り得ない。

この世ならざる異形の外観は、間違いなく悪魔のそれだ。

「やっぱり、＜この世界＞にも悪魔はいるみたいね」

たつたいま絶命し消滅した＜蟲＞より遠く的位置、そこに突如として同種の悪魔の群れが出現していた。

それに加え、蟲たちの中心に先ほど破壊した筈の戦車の威容があった。

ダンテに切り開かれた車体の傷を、不気味に脈動する＜肉片＞に塞がれた状態で。

「乗っ取られた、ってことか」

無機物に魔が融合し、半機半魔の存在が生まれるのは、別にあり得ないことではない。

何よりその肉感は、周囲に群れる蟲のそれと同じものだ。

ならば物質への寄生——というより、融合といった方が適切か——が、あの蟲の能力なのだろう。

依り代への憑依^{ホゼッション}を得意とする悪魔の中にあつては、べつだん珍しい能力ではない。

不意に、その＜肉片＞の中心が左右に割れた。

現れたのは、ギョロギョロと蠢く＜眼球＞

その単眼のおぞましい＜視線＞に睨み据えられた二人は、しかし怖じることなく、むしろ期せずして旧友と再会したかのように懐かしげな表情を浮かべた。

「こっちの方が馴染み深いわね」

「違うないな」

少なくとも、人が変質した『悪魔もどき』であるガイストよりは、
撃ち尽くしたサブマシンガンの弾を再装填し、淀みなく戦闘態勢
を整えるベリル。

その間にも、悪魔は次々と数を増していく。ダンテとベリルの周
囲には、すでに蟲たちの包囲網が出来つつあった。

それを、まるで恐れるに足らない、とでも言わんばかりに、ベリ
ルは悪夢の光景を前にしてなお獰猛な笑みを浮かべて見せた。

「来なさい害虫。でも生憎と殺虫剤は持ち合わせてないのよ。だか
ら鉛玉で駆除してあげるわ」

悪魔を恐れない人間がいる。

闇への恐怖を怒りで圧倒した人間だ。他者を想い、悪を憎む、そ
んなく当たり前前の感情に心を滾らせた人間だ。
穢れたく本能のまま無辜の人々を殺す犬畜生め、いざ知るがい
い。

私は<理性>でもってお前達を狩ってやる。どちらが本当に『恐
ろしい』か教えてやるわ、悪魔ども。

「これから忙しくなりそうね、ダンテ？」

「ああ、まったくだ。だが退屈しないってのはいいことだぜ」

背中合わせになり、余裕も綽々に言葉を交わす。

「……呆れた。まさか、暇潰しのつもり？」

「人生には刺激が必要なのだ。なあ、オマエらもそう思うだろう？」

ダンテの問いかけに応えるように、一斉に飛び掛かる蟲の群れ。
生ける戦車より撃ち出される砲火。

それらを打ち倒すべく行動を開始する、別世界よりこの地に降り立ったデビルハンター、二人。

「Let's Rock!」

そして、ダンテとベリルは激しい銃火でもって敵を迎え撃った――。

<ダンテの解説コーナー>

・ウォールナッツヘッド

ガイストは一樣にして勘弁してほしいくらい醜悪な外見だが、その中でも一際グロテスクなのがこのクルミ頭だ。

どでかい脳漿オツムが物理法則に逆らって宙に浮いてるんだぜ？ まさに悪夢の光景だ。俺だってそう何度も見たくはない。

それが人間の魂の成れの果て、っていうんなら尚更な……

その見た目通り、コイツの知能はかなり高い。加えて精神力もな。それらのく見えない力>が極まった結果、驚くことに空間に作用する『念力』を発動できるまでに至っちまった。

その『念力』を使って周囲にある物体を操るだけじゃなく、結界を作り出して人間を閉じ込めたり、相手の五感を幻惑して姿を迷彩してきやがる。

コイツ自体に直接的な攻撃力はないが、トリッキーさにかけては一癖も二癖もある厄介な敵だぜ。

こつこつ手合いはさつさと片付けるのが得策だ。

ま、コイツほどヘッドショットが狙いやすいく、的もないだろうしな。

調子付く前に一発ぶち込んでやるとしよつぜ。

Chapter? : 地獄に至る橋（後書き）

今回でSTAGE1のダンテパートは終わり。ベリルとの再会は予想以上に早かったよね。うん、それは作者にとっても（爆）
次回はアリシア編。ファントムとの戦いの結末は、如何に……？

Chapter? : 大魔法

魔獣の一撃が振り下ろされると同時に、爆音が響き渡った。

ファントムの前脚は地面を抉り抜き、その衝撃で瓦礫を周囲に撒き散らした。見た目に違わぬ、巨体に見合った破壊力。

しかしその強烈なインパクトの瞬間、アリシアはすでに跳躍して宙を舞っていた。

身軽に体を翻し、空中でガンロッドを連射する。

射撃の反動を利用して体勢を整え、アリシアは優雅に着地した。着地しながら着弾を確認する。

弾はすべて、ファントムに過たず命中していた。

だが、『それだけ』だ。重戦車もかくや、という堅牢な外骨格には傷一つ付いていない。つまり、全くのノーダメージだった。

『グアハハハッ！ 今、何かしたか！？』

地を揺るがす豪笑を上げながら、ファントムは力を溜めるように一度その身を屈めると――次の瞬間、空高く『跳び上がった』。

「……ッ！？」

？なんと！？

思わず目を見開くアリシア。驚愕の声を上げるダークネス。

むべなるかな。あの鈍重そうな巨体に、どうして斯様な跳躍力が備わっているなどと予想できようか。

その着地点にいるアリシアに向かい、圧倒的質量が唸りを上げて落下する。

「く……ッ！」

飛び込むようにして前方に転がり、どうかその一撃の範囲内から脱すると、紙一重の差でファントムの巨体が地面に激突した。

盛大に地響きが巻き起こり、地面から土煙が吹き上がる。アリシアは振り返りガンロッドを構えたが、その土煙で視界を覆われ狙いがつけられない。

突如、夥しいまでの魔力の収束とともに、土色のカーテンが吸い込まれるように晴れていく。

その収束の向かう先は、大口を開けた化け蜘蛛の口内。そこに、紅蓮に煌く業火が渦を巻いていた。

？——ッ！ 避ける、アリシア！？

相棒の声に無意識に反応した両足が、弾けるようにアリシアの体を横つ飛びさせていた。

一瞬遅れて、彼女のいた場所を、ファントムの口から発射された火炎弾が通り過ぎる。

地獄の業火を球状に固めて撃ち出す一撃。その熱気は、ただ掠めただけでもアリシアの両足に燃えるような苦痛をもたらし、彼女の動きを一瞬硬直させる。

その隙に、ファントムは間髪容れず次弾を放っていた。

目前に迫る小太陽。痛みに動きを鈍らせた漆黒の魔女は、回避はもう間に合わないかと速断し、瞬時に防御の手段を講じた。

魔法『エンシェントウォール』——ダンテの弾幕をやり過ごした防御壁が、アリシアを守るべく火炎弾の前に立ちはだかる。

激突、そして爆音。

魔力で形成された壁が、灼熱の激震を受け止めると同時に爆砕し、その衝撃にアリシアの体が後方へと吹き飛ばされた。

直撃こそ防いだが、その後に生じる衝撃波までは完全に防御の許容を超えていたのだ。

「ぐ……う」

伏臥し、頭を振って朦朧とする意識をはっきりさせるアリシア。すぐ鼻先の地面が、徐々に熱を帯びて赤く発光していると気付いたのは、その時だった。

脳裏に激しい警鐘が鳴り響く。それに従い、アリシアは慌てて体を横に転がした。

次の瞬間、間欠泉のように噴き上がる緋色の飛沫。天まで届けとばかりに巨大な火柱が上がる。

そのく攻撃を認めたアリシアは、続け様に発生する紅蓮の奔流から逃れるべく駆け出した。

見れば、ファントムがその頭部を地面に埋めていた。あの様にして自身の火炎の魔力を大地に浸透させ、この連続する火柱を『喚び出して』いるようだ。

「やりたい放題やってくれるわね……！」

立て続けに噴き上がる火柱と、背中を撫ぜる熱風に悪態を吐きながら、アリシアは自らの武器を『変形』させた。ガンロッドの銃身が文字通り一転する。

キャノンフォーム——対戦車ライフルとなんら遜色ない、絶大な攻撃力を誇る魔銃が、いま黒鉄の鎌首をもたげる。

「喰らいなさい……！」

ライフル弾を模した魔力の弾丸。こと貫通力においては分厚い鉄板すら貫く。

そのガンロッドの中でも最強の一発が、轟音とともに発射され、直撃し——そしてファントムの外骨格に弾き返された。

『H A H A H A ! 全く効かぬわ、小娘——ッ!!』

いみじくも、着弾した箇所には傷どころか曇り一つなく、無傷の威容を誇っている。

戦車の装甲をも穿つであろうキャノンの一撃でも突破できない、その絶対的にして絶望的な防御力。

冷静沈着なアリシアをして、思わず焦燥の歯噛みをせずにはいられない。ガンロッドの持つ最上威力の一撃を防がれた時点で、この魔銃が通用しないと証明されたも同然なのだ。

？まったく、厄介な敵ね。何か突破口はないの？？

？——ヤツにダメージを与えるには、火球放出のために魔力防御の亀裂がある口を狙うか、あるいは同じく亀裂のある背中の隙間に攻撃を叩き込むしかない？

だが、それは言ってみれば砲弾の込められた筒先に無謀にも突っ込んでいくようなものだ。まさに捨て身の特攻である。

流石のアリシアも、それを実行するのは気が引けるのか、躊躇いの色に表情を曇らせた。

？……感謝祭の七面鳥にはなりたくないわ？

？安心しろ。ヤツの炎を喰らえば消し炭も残らん？

彼女の苦渋を密かに面白がる余裕もあらばこそ、ダークネスは似合わない軽口で応じて見せる。

そう、余裕——

契約者の裡より戦況を推し量っていた高位悪魔は、この時点をもつて敵の力の程を見切っていたのだ。

結論から言えば——問題ない。こちらにはヤツを倒し得る秘中の

秘策がある。

先ほどく無力の烙印を押されたガンロッドを選択肢から除けば、残る手段は得意の魔法による攻撃以外に有り得ない。

なればこそ、その魔法を司るダークネスは自信と確信とを込めて宿主に進言した。

「喜ベアリシア。ヤツを葬り去ることの出来る極大の一撃——『稲妻』を使えるようにしてやる？」

そしてヤツに身の程というものを教えてやれ。
貴様は所詮、地を這う虫ケラにすぎん、とな——

その後、ファントムの猛攻は間断なく、容赦なく、周囲一帯を焦土と化すまで文字通り火の手を広げていった。
既にアリシアの姿は朦々と立ち上る黒煙と粉塵とに飲み込まれ、二度と戻らないかのように思えた。

『ふん、他愛ない。所詮はこの程度か。つくづく人間とは我らに滅ぼされるべく存在するというわけ——』
「滅ぼされるのはお前達の方よ、悪魔」

ファントムの言葉を遮った凜と響く声は、徐々に晴れつつある黒煙の中より現れた黒衣のものだった。

いまだ健在のアリシアの姿に、いささか動揺したファントムは、そのとき膨大な魔力の奔流を頭上に感じ取った。

見上げれば、黒々とした厚い雲の層がファントムの真上の位置でゴロゴロと唸り声を上げている。

突如として出現したその雷雲は、当然ながら自然発生したものでなく、アリシアの魔力によって呼び寄せられた天外の怪異であっ

た。

『馬鹿な……人間ごときが天候を操るだど!?』

ファントムの驚愕の間にも、雷雲はその莫大な自然エネルギーを蓄えていく。それが一気に解放された時の破壊力は計り知れない。左腕を振りかざすアリシア。その手先に束ねられるかのように雲の一点へと集束する雷光。

そして暗黒の空が咆哮する。今――

「塵と消えるがいい!」

高らかに叫びながら左腕を振り下ろす。

それに導かれるようにして破滅の稲妻が天と地を繋いだ。

災厄招来。

その恐るべき御名を大魔法『サンダー』――究極の破壊力を有する、天上より降る極大の一撃。

轟、と閃く落雷の鉄槌が打ち抜くのはファントムの背中。奇しくも弱点の部位であった。

『グアアアアアッ!』

爆裂する雷鳴と人外の悲鳴とが響き渡った。

いかなファントムとて、比類なき大悪魔とて、斯様なく天災の前には形無しである。魔は、より強大な魔によって滅ぼされるのが闇の条理だ。

『お、ノレ……オノレエ! 人間風情が――ッ!』

だが果たして、ファントムはまだ息絶えていなかった。

マグマの血を噴出させながら怒りと憎しみの限りに呪詛の禍言を吐き散らす。

その異形の大口に——そのとき、場違いも甚だしい赤い薔薇が投げ込まれた。

その花卉がファントムの体内で散った瞬間、幾本もの槍が外側に向けて穂先を伸ばし、ファントムの巨軀をくまなく内側から串刺しにした。

『~~~~~ッ!』

もはや声にならない。胴体部分の節々から突き出る槍がもたらす激痛にファントムはのた打ち回る。

魔法『ローズピア』の真骨頂、燃焼による追加ダメージは、火炎の悪魔であるファントムには何ら効果を示さなかったが、槍が貫通した時点で既にもう致命傷だった。

『その力……悪魔のものだな……? キサマ……人間では、ないのか……っ?』

つかつかとブーツを鳴らして歩み寄ってくるアリシアに向けて、息も絶え絶えに問い質すファントム。

その口に、ガンロッドの銃口が突き入れられた。

「私は、お前たち悪魔をこの世界から根絶やしにする——魔女よ」

静かな宣告とともに、引き金が引かれた。

無慈悲な銃弾の洗礼がファントムを体内から喰い荒らす。

もはや虫の息のファントムにとって、それは悪辣にして残虐極まりないトドメの一手だった。

割れ砕ける頭部。ちぎれ飛ぶマグマの肉片。放物線を描く目玉が、

アリシアの足元に落ちる。

銃声は、ファントムの胴体をズタズタに引き裂くまで、続いた。完膚無きまでに殺され、力尽き、やがて消滅を始める大悪魔だったモノ。

現世への実体化を解れさせ、徐々に輪郭を失っていくその残骸を見下ろしながら、アリシアは口を開く。

「……闇より生まれ、死と恐怖を振り撒き、また闇へと還る」

それが<悪魔>の死だ。

奴らはまるで魔法のように現れては消える。その場所も自由、時間も自由、形すら未定だ。

そんな不確定な存在が、いま世界中に蔓延っている――

死と恐怖を苗床にして新たな死と恐怖を生み出し、果てなき闇と混沌の増殖を形成しつつある――

ならば、もはや人に抗う術はないのではないか？

悪魔を狩り、その死を見るたびに、そんな無限を見ているような不安が胸に燦る。

？なに、恐れることはないぞアリシア。無限に現れるというなら――
――？

物憂げな彼女の胸中を汲み取り、ダークネスが厳かに告げた。

その言葉を聞き、我知らず弱気になっていた自分を戒めるように宣言する。ひどく冷たい声で。

「そう――私は、無限に倒すだけよ」

零下に凍えた眼差しのまま、アリシアは足元の目玉をぐちゃりと踏み潰した――。

新聞＜DAY BREAK TIMES＞の記事一覧

『生存者達の声!』

この状況下で多くの人が無事逃げ、生き延びたようだ。
避難した人々が感謝している＜黒衣の魔女＞とは救世主なのか？
そして新たに現れた＜真紅の魔剣士＞とは何者なのか？

Chapter? : 大魔法（後書き）

低カロリーをコンセプトとしている本作だが、今回の戦闘シーンは流石にあっさりしすぎたか？ と危惧する45口径（呼称）です。ビクビクしながらフィードバックを待ちます（汗）

ああ、ちなみに今回でSTAGE1は終了です。なので最後はバレットウィッチお馴染みの新聞にしました。そこ、＜ダンテの解説コーナー＞と比べたら内容が少ないと言っな。

次回からようやく激戦区の街の中へ。『あの男』と『あの悪魔』の登場はもちろんのこと、ちょっと意外な悪魔も登場します。程よくお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981p/>

Shoot The Works

2011年11月12日23時34分発行